くもりの日の砂浜に、かもめがいる。多くは飛んではいない。飛んでいるのは砂浜に着地しようとしている二、三匹のかもめだけで、多くは砂浜に転がる流木の周りを歩き回っていたり、ただ座っていたりする。彼等彼女等は呼びかけに応じるようにそこに集まってきている。

流木は大きかった。その砂浜に訪れた男のほとんどがその流木を動かそうと一度は行動するが、誰もそのオブジェを動かせたことはなかった。ときに、どうやってここに運ばれたのだろうかと思考する人がいたが、だれもわからないままだ。流木の太さは成人男性が腰かけても足が地に着かないほどだった。女性であれば完全に足が浮いた。

かもめの他に、人がいた。大きく白いリボンを胸元に付けた黒いドレスを着た、女性だった。かもめは彼女の周りに集まっていた。彼女は物憂げに白波立つ荒海を眺めながら、今はただ座っている。

『今は』というのは、彼女の傍らに辞書のように太い本があるからだ。表表紙すら重いのか、風に吹かれて開かされようとはするが、決して開け切らない。

――なんの本だろうか。

砂浜のランニングを日課とする丘部戒一は気になった。しかし不思議なことに、どこのだれかはすこしも疑問に思わなかった。戒一は流木に腰かける女性がどこのだれか知っている。否。海を臨む高台に建つ洋館に住む女性を知らない住人はいなかった。

彼女と彼は生来その海辺の小さな町に住み続けているが、彼が彼女を見かける回数は今回でやっと二桁というところだった。

「……」

気まぐれと言うほかなかった。戒一は彼女への接触を試みた。

足音は風音と夢中がかき消した。

「なんで荒れた海みてるんすか」

「うわぁっ？！」

だから彼女は驚き、声をかけた側をもびっくりさせるぐらいには大きな声を出した。振り向きざまに見せた彼女の表情はすこし目を見張っている。

「び、びっくりした……」

非難混じりにそう言う口はしかし、すぐに改められる。

「って、君は……たしかいつも海沿い走ってるコよね、キミ」

「え、ああはい」

「いつも走ってるのを上から見てるからさ、気になってたんだ」

戒一はその言葉にはまったくと言っていいほど驚かなかった。彼は彼女の視線の先を追う。先には切り立った崖に建つ洋館。たしかにそこからであれば砂浜全体を見渡せた。

ああなるほど、という納得と、やはりウワサ通りの女性なのかもしれない、という好奇心がが湧いた。